

生徒指導に関する一考察 —信頼関係を築く組織的な指導のありかた—

A Study of Student Guidance —Building Mutual Trust through Organizational Guidance—

森 啓二* 堀 正人**

要旨

学習指導要領の総則によると、教師は生徒との信頼関係、人間関係を育てることによって、生徒理解を深め、日頃から学級経営の充実を図ることで生徒に自主的に判断、行動し自己を生かすことを学ばせることが大切であるとされている。ここでいうところの生徒指導は第一に生徒理解であり、望ましい人間関係づくりと集団指導及び個別指導である。それらは学校全体で進められる生徒指導となるのである。このようにして生徒は社会によって守られ育まれており、その結果において人格が形成されて生徒たちは未来に向かって歩んで行くのである。

キーワード：人間関係 教育課程 集団指導 キャリア教育 学習形態 自己肯定感

1、生徒指導の原理

生徒指導の前提となる教育観については、生徒の内面に変化が生じるようにし、自ら判断して自らの行為や行動を律することができる基本的な資質や能力を育成することである。その内容は自発性、自主性、自律性、主体性、自己指導能力の育成が主な指導項目である。さらに、生徒が主体的に取り組めるような配慮を行うことによって、自己学習力、自己指導能力、課題発見力が育つのである。また、指導観については場や機会の提供を図り、自己決定をさせ、様々な行事等に参加させ、役割を与えることによって自発的かつ主体的な成長発達のプロセスを援助するのである。そして、生きる力を伸ばすため「公」を意識させ、効果的に生徒の力を伸ばすことに配慮しなければならない。これらの主な指導法は集団指導を通じた「個の育成」であり、一斉授業の中にグループ学習を取り入れる配慮等も大切である。¹⁾

さらに、教員の生徒理解（情報の収集）が問われる。教員は生徒の能力、適正、興味、関心、意欲、目標、家庭状況を把握し、過去の指導の経過を知ることによって、それまでの対話、保護者の状況、部活の現状、教科学習への取り組み等総合的に情報を集約整理して取り組むのが生徒指導である。近年は教員による共通理解がよく話題になっている。それは、学校集団として目指している方向性の確認であり集団の質の分析、段階的な改善の企画実行である。²⁾

次に集団指導の方法原理として、社会の一員としての自覚と責任の育成が第一であり、モラル、ルールの指導が欠かせない。そしていじめなどの防止指導の中心となっている他者との協調性の育成で互いに尊重し、お互いのよさを認め合う指導は特に大切である。具体的には、自分の意見が述べられ、安心して生活でき、個性を発揮できることによって集団での存在感を実

* 親和中学校・親和女子高等学校 特任教諭

** 神戸親和女子大学 非常勤講師

感できるのである。そのことで、他者と好ましい人間関係や成就感をもつことができ自己肯定感、自己有用感を培うことができるのである。最終的には、進路指導の仕上げとなる自己実現の喜びを味わうことができる。ここで、筆者が教員として体験した中学校での一コマを挙げて生徒指導でよく言われてきた学校や学年が「荒れる」ということを考察してみたい。

2、生徒指導の原点

荒れた学校の教師はどうしていたかを考えてみたい。昔は多くの中学校でこれから述べることが当たり前だったと想像していただきたい。それは昼夜翻る校旗を見つめて砂を噛むような日々が続いた頃である。入学式当日からあまりの悲惨な状況の生徒たちを前にして絶望感に襲われたが、教師たちは笑って卒業させようという合言葉を自分たちに言い聞かせていた。最初にした不毛な作業は、三年間の日めくりカレンダーを作り、卒業まであと何日というカウントダウンでマインドコントロールすることがせめてもの慰めであった。そして、学校正常化の第一歩として、教師たちは校風刷新・自己開発という「おまじない」を毎日生徒たちに訴えていた。このような四字熟語的なスローガンは雰囲気を作り出すのであり、書けなくても生徒たちに言わせるとやがて口癖になるのは生徒の方であった。通常な学校なら毎日の朝の打ち合わせは大切な情報共有の機会であるが、教師がその打ち合わせに集まるとその間教室が無法地帯になるのである。したがって職員打合せ（職朝）が全員でできなくなり分散して情報交換をする工夫をした。つまり生徒の居る所に常に教師が居ること、授業中より休憩時間の大変さ、目を離せない緊張感などが続くのであった。さらに、工夫したことは職員全員が校門、校舎、教室の鍵を共通にして常に所持していることである。その使い方は、校舎の内側からロックして他学年の生徒の侵入を防ぎ、生徒指導の妨害をさせないことであった。また、生徒が登校したら校門は常に閉じられており、門番の教師が配置されるようになった。校門当番が始まったきっかけは暴走單車や自転車を阻止することが目的であったが、遅刻者に対する暖かい声かけ、屋前に弁当を届ける保護者との交流、そして最大の成果は当番同士の教師の交流と副産物も多かった。校門だけではなく、様々な部屋の鍵を共通化して全教師がもっているのも、授業より大変だった業間巡視にはどの部屋も生徒の臨時指導の場所になり、エスケープ室としての活用となった。そして、頻繁にガラスが割れ、落書きがなされることへの対策として、教師はガラス職人やペンキ屋になって即座に対応修復した。生徒指導のできる教師は醜い物や壊れたものは一般生徒に見せないこと、どんなに破壊されても短時間で修復手当ができることであった。また、生徒たちに興味のある実技教科は刃物を使うので危険だが、無法地帯では教師の負けでもあったので、生徒に係活動をさせて責任を持たせ、居場所を作り興味をもたせてグループ活動等授業形態を工夫した。教師たちは「運命共同体」という悲惨な言葉で自らを納得させ果敢に生徒に向かっていった。そして、三年間はなに何があっても担任する覚悟を自分に言い聞かせたのである。学年集会で集団をよい雰囲気に持っていくことを教師が交代で実践した。説教ではだめで、わかりやすく価値ある話ができることが大切であった。こうして、学年の指導がすべての一歩、上の学年より一歩前進が合言葉となった。上級生のまねをするなど教えることは一般常識とは逆であり、今では想像できない。生徒が授業中に徘徊する学校は教師もよく廊下を徘徊した。こうした日常的なエスケープの対応策が出発点であり、生徒理解への原点であった。

そこでは生徒が徒党を組むなら教師も一丸となって行動した。例えば喫煙の指導ではこのようにした。目の前で吸わせない、吸う時間を与えないことに徹し、巡回をした。このような教師の背中を普通の一般生徒は常に見ていたのである。この一般生徒たちが後にリーダーとして学校正常化に取り組んでくれたのであった。こうした日々は激務となったが、教師集団の志を確認するためにも職員親睦旅行や職員行事は団結の証、職員組織の活性化の原点となった。つらい学校のことを忘れて楽しみ、耐えられる自信、それは職員組織であり、生徒指導の自信にもなったのであった。

以上のような状況の学校はもう存在しないかもしれない。さらに現在の大学教職課程の学生にとっては想像を絶する世界だろう。しかし、あの時の教師の志を知ってもらい生徒指導や進路指導の在り方を考察する材料としたのである。生徒指導は組織で行うものであり、一部の屈強な教師が担当するものではないことを知ってもらう一例である。

3、生徒指導と学習指導

この頃、「新学習システム」が打ち出され、教師たちはこの言葉に真剣に取り組んだ。かねてから実践してきた同和教育の延長としてとらえて、教師の願いは「一人残らず指導目標を達成する」と目標をめざした。当時は45人学級から40人学級となり、さらに平均30人へと学級規模の減少に伴う教育効果について検証する必要があるがあった。グラス・スミス曲線では教育効果は40～30～20人と減少しても大きくならないとされ20人以下で急速に大きくなるとされていた。そこで同和教育における少人数別室指導では濃密学習と称して新しい学習形態の導入をしていた。それは必要なとき必要な場面で20人以下の学習集団を作り指導を行えるようにすることであった。後に少人数指導と言われるものであり、40人学級はそのままにして別の方策を考えて実践していたのである。

次に、学級規模が縮小してきたのにもかかわらず、指導法だけは一向に変らない。つまりは一斉授業とチョーク黒板、プリント学習であった。学習は孤立した状態では成立せず、一斉授業は「モデルの提示」の機会として生徒たちがリードして「課題解決学習」をするという現代の「総合的な学習の時間」で実施されている学習方法にも取り組んでいたのである。さらに「個に応じた学習指導」を実施するための工夫がなされ、大G：小G：個別＝4：3：3が適切であるという考えに基づき、小G学習、ペア学習、一人学習等を臨機応変に取り入れるという一斉授業では見られないこれらの方法を実践して学習指導を実践した。これらは、同和教育推進教員、新学習システム推進教員等の加配教員の活用で推進されていたのであった。最大の指導方法は複数担任制であったが、複数担任制は一つの形態にすぎず、学年チーム、教科チームこそ新学習システムという認識に基づき、学習指導及び生徒指導は複数の教師で責任をもって実践した。教室以外のスペースの活用を図ることも前述の緊急時の利用に留まらず、習熟度別指導教室として定着したのである。

アメリカの新学習システムでは、数英は無学年制（習熟度別）とし、週初めの朝に短い打合せの時間をとっているようであり、木曜日の午後には次回の指導計画の立案をしているという報告を聞き、実践しようとしたが教員の仕事内容が多岐に渡る当時の状況ではなかなか実現しなかった。しかし、教師たちは教育効果向上のために、ひとりひとりの子どもの中に学習を成

立させることを目標に、一斉授業オンリーというあり方を変えようとした。そして一人の教師の目ではなく複数の教師の目で子どもを見つめることを実践した。こうして志溢れる教師集団という豊かな人的環境を保障することによって、生徒たちにとっても学校生活が楽しく豊かになってきた。さらに教師の組織化だけでなく生徒も組織化し、時には学級という壁を取り払うことも実践した。今日でいうところの「開かれた教室」、「班・核・討議づくり」等学習指導における様々な工夫と実践が生徒指導にいい影響を与えていった。そしてそれがスパイラル的な効果となり学校は少しずつ正常化に向かっていったのである。生徒指導と学習指導は学校教育の両輪であると言われているが、この経験から言えることは学習指導も生徒指導そのものであるということである。両輪ではなく、生徒指導は本来の学習指導を支える組織力あったのである。生徒の安全を守り、進路保障と言われていた生徒の自己実現をサポートできる安定した学校を実現することが大切なのである。

学習指導と生徒指導の両立という生徒指導の原点を実践していた頃は、一人一人の「ノート指導」にどの教師も日々取り組んでいた。このノートは担任と生徒との連絡帳であり交換日記のようなものである。このノートから「いじめの早期発見」に至ったことはいうまでもない。ここでは生徒指導に大きく貢献した「ノート指導」について考察する。ノートの本質はノートを創ることである。ノートは人の話を聞いて記録するものであり普通は小学生のころから訓練している。高学年になると自分の考えた目標や課題を書きとめる課題ノートにもなる。後にそのノートをみて内容を記憶し、他の人にその話をする時に使うのである。また、内容のチェックをするときにも使う。こうして作ったノートは様々な「ノートの効用」がある。まず、課題を明確にでき、次に何をやればいいのかがわかる。これはノートが自分のコーチになっているということである。単なる記憶ではなく客観性のある物になるのである。なぜか文字にすると権威が出てくるものである。そして自分自身の工夫が始まる。必要な情報を選び分けてノートに書き、最後に大切なものが出来上がるのである。このノートはオリジナリティーが高く、なくなれば困る程大切なものである。大人の世界では「備忘録」という言葉もあるほどである。

ノートをとる習慣の集積は計り知れない教育効果を生んでいる。人の話をメモして何時でも再生できるようにするのである。これは、メモをとる習慣が聞き方を変えるのである。大袈裟だが資質や才能より人間は習慣で決まるのではないだろうか。しかし、学校では学習習慣を変えねばならない時に対応できない人が落ちこぼれているのである。教師の立場から言えば習慣を憎んで人を憎まずである。生徒がよい習慣を獲得するまで粘り強い指導が始まるのである。学力向上は二の次であり、まずノートを創るという基本的な習慣づけから日々取り組んでいたのである。課題に取り組むルールは、まず目標を教師がたてることから始める。例えば、毎日一言日記をつけようとか自由勉強を1ページしようといった簡単な課題である。小学時代の百升計算や百字帳の再現である。文字の読み書きの習慣に乏しい生徒にとっては苦痛であるが、日々提出しコメントを出して切磋琢磨する環境を教師がつくるのである。生徒は純粋でもあり、シール、花丸、ポイント、ゲーム、ご褒美とあらゆる餌でモチベーションをあげるために教師も様々な工夫をしてノートを診る。時にはこの作業をゲーム化することもある。サッカーは手を使わないからゲームになったように様々な工夫をする。その結果、工夫や努力が結果につながることをお互いに学ぶのである。こうして、生徒が次第に落ち着き勉強をやる気になって行

くを見るのは教師にとって一番うれしいときでもある。教師自身の体調が悪い時でも生徒が喜ぶと治るものである。この喜びは勤務時間や労働という範疇を超えたものであり、教師の使命感がより強くなるときでもある。これと同時に、授業に使うプリントづくりも教師の仕事の中核である。教師は、プリント作成能力を経験によって磨いている。本や新聞の切り貼りは教師の教養の産物であり、編纂能力でもある。いいものを見つけ組み合わせ、生徒の力に応じてセレクトする感覚は教師にとって至福の一時でもある。こうすることが生徒指導の本質ではないだろうか、過去を振り返って思うのである。

さらに、IT時代の影響か、読書（文字を読むこと）習慣の乏しい生徒が多く、その対策の一環として、学級通信を文字になじむ習慣づくりと考え、毎日発行している教師もいた。読書カードとシール獲得競争（数値目標が意欲を高める）で読書の習慣を着けようと頑張った教師もいた。こうした努力の結果、当時は不登校がいなくなったのである。知的好奇心ができると学校生活も生徒にとって肯定的になるのであろうか。好奇心や向上心は社会に出ると大切ということを手伝ってくれたと思う。

以上から、権威ある教師というものを考えてみたい。年間の指導カリキュラムを自分で作る教師であり、読書活動、添削指導をはじめ自分でテキストを揃え、課題を与え、メニューを創るのである。このように自作のプリントを創ることが好きな人は教師に向いているのである。生徒は卒業してから学生時代の日記やノートを見ると当時のことがよみがえるのである。ノートの整理法や使い方は何時だれに学んだのだろうか、褒められたこと、工夫したこと、苦労したこと等の思い出がこれからの人生のバネになるのである。このような指導が生徒指導そのものであり、「学習習慣定着指導」でもある。

4、教職の意識と生徒指導体制

全国の公立小中学校の教員を対象としたアンケート調査によると、一般企業社員と比較して教員は仕事の満足感が高い傾向が見られ、やりがいを感じているとか、成長できている、誇りを持っている、他の職員から学ぶことが多いなどの項目で高い評価を示しているようである。ここではいきいき働く教員の姿が浮かんでくる。³⁾

さらに一般企業と比較した場合、教員の仕事や職業生活によるストレスはやや高い傾向があり、仕事の質や仕事の量の問題が突出して高く仕事そのものに対するストレスが大きいことがわかるのである。一方一般企業では、職場の人間関係や組織の将来性などのストレスが教員に比べ圧倒的に高く、学校教員は生徒指導等で組織的に学校教育に取り組んでいる状況が見えてくるのである。⁴⁾

何よりも学校が安定して生徒たちが向上心を示し教育効果が顕著になれば教員はさらに楽しく仕事をするであろう。こうして、学校の組織を挙げて生徒指導をしている学校や、そこでの仕事に満足感を感じている教員をもっと応援してワークライフバランスの調和を図ることも大切である。

5、生徒指導の共通理解

新任の教員に生徒指導実践演習をする教材としてよく使われるのが短縮事例研究である。こ

れはシカゴ方式と言われて多くの教員研修で行われてきた。大学での教職課程の授業ではもちろん演習として行ったが、授業では実際の中学校で毎週行われている生徒指導連絡会を取り上げ考察させてみた。

ある日の生徒指導連絡会資料より（筆者作成より抜粋）

1年B子

- ・6月中旬より不登校、母親と連絡が取れない。
- ・ゲームセンターから連絡があった。
- ・電話が繋がらない
- ・祖母は田舎（篠山市）にいる
- ・隣の中学校の2年生（K男）と付き合う。

2年M子

- ・目立たない様子だが、直接イジメず、かき回す。
- ・常にトラブルの種を蒔いている。
- ・母親との関係に問題がある。
- ・家庭への憎悪がうかがえる。
- ・食事が与えられていないこともある。
- ・弁当がない。

次に、上記資料の考察をした結果、教職課程を受講した学生の主な考えを記す。（大学教職課程受講レポート、2016）（下線部筆者）。

- ・他学年の生徒はともかくこのような生徒がいたら毎朝の挨拶等声を掛けたい。
- ・目立つ服装の女子は声を掛けやすい。そして話し相手になろう。
- ・母親の愛情が感じられない生徒が多いので、まず話し相手になり相談に乗ってやろう。
- ・担任を超える指導はできないが、家庭訪問している担任に授業の補欠等協力しよう
- ・親の代わりはできないが親に協力はできる

演習事例は、過去の実際の資料である。今の大学生が想像できないような生徒もいるが、当該中学では日々担任教師が悩み生徒指導を続けたのである。最初に講師が一人の生徒の指導法を紹介し、その後この生徒がどのようなになったかを説明した。学生の演習は担任の立場で次の指導方法を考察し発表するのである。まず、ここから生徒指導のノウハウも見えてくるのである。この資料に取り組むことで、教員の共通理解が出来上がることに注目させている。

次に、教育実習を終えた4回生に「教職実践演習」の課題として場面对応や指導を考察させた。まず、見本として筆者の模範対応を示した上で学生に考えさせた。さらにいくつかの項目ではロールプレイにも取り組んだ。その抜粋を以下に示す。（下線部筆者）。

（課題と模範解答）

今、貴女はある公立中学校の1年生の学級担任をしています。学級懇談会で以下のような質問や要望が保護者から出ました。さてどのように返答しますか。誠意を持って教えてください。

①授業参観で、実技教科ばかり2時間も見学しました。もっと主教科を見たいと思います。

A：参観日のために特別に時間割を組んでいる学校よりローテーションをしている方が多い。

授業の公開デーといった日を設けているので、他の教科はお子様の時間割をみて見学し

て下さい。と伝える。

②〇〇科の先生がよく休む。授業の進度が他の学校に比べて遅れていると塾で言われています。
塾の授業は先に進んでしまうので困っています。

A：休むことは教師個人の資質に関する問題なので「校長に伝えます」で可。塾の問題については塾で予習、学校や家庭で復習という学習方式を定着してください。と言う程度でよい。塾の役割等には触れない事。

以上、このような課題の場面は大学の教職課程を受講している学生たちにとっては初めて経験する内容が大半である。教員の資質、学校の組織、生徒指導情報の報告、連絡、相談等多岐に及ぶ内容だが、実際の生徒指導をイメージしその在り方を考察できたように思う。

6、進路指導について

職業指導（1927年文部省訓令）から始まり進路指導、そしてキャリア教育への変遷があり、各学校段階間における継続的なキャリア教育・進路指導の必要性が以前から言われてきている。今、若年層の就労の現状は厳しい。自分に合う仕事、合わない仕事、人間関係、働く自身喪失の若者が増加している。これを七五三現象といい、就職して3年以内に離職する率は中卒7割、高卒5割、大卒3割にも上っている。一方社会では、進路未決定者の問題と共にフリーター・ニート等学校から社会（職業生活）への接続がうまく図られていない状況がある。新卒無業者（進学も就職もしていない）高卒6.6万人、大卒8.2万人（H17）ニート（働きもせず、教育も訓練も受けていないもの）64万人（H17）にも達しており、毎年増加している。そこで、進路指導とは何か、何のために必要かを考察したい。自分にあった仕事がわからない若年者（自己理解の不足）や人間関係がよくないという離職理由（人間関係調整能力の不足）が多く出ている。このように働く自信がもてない若年者（労働体験の不足）の増加に対応するため進路指導の果たす役割は大きい。学校では生徒指導の一環として以前から様々な指導が行われてきた。それらは、生徒理解と自己理解、進路情報を収集・活用する活動、啓発的な経験を得させる活動、進路相談（キャリアカウンセリング）の実施、進路先の決定への指導・援助、卒業後の追指導（フォローアップ）と評価等である。

新学習指導要領における進路指導の位置づけは、その総則で、特別活動（学級活動）、総合的な学習の時間、全教育活動で学ぶとし、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこととなっている。さらにキャリア教育についてそのポイントを示している。それは、子供たちの発達段階やその発達課題と深くかかわりながら段階を追って発達していくというキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てるとなっている。⁵⁾

進路指導の現状が進学先の決定であり、出口指導に終わっている状況である。しかし、各中学校では様々な工夫をして、職業講話、職業体験や自己体験の発表演習に取り組んでいる。進路指導からキャリア教育へ取り組んでいる例をあげると以下のような取り組みがある。

- ・第1学年における進路指導については、自己理解、身近な職業と生活について考えて、人間関係づくり、働く人々を知る

- ・第2学年におけるキャリア教育については、職業の世界を知るため職場体験活動をする。
- ・第3学年における進路指導については、自分自身を見つめ、進路を考える。さらに卒業生から学ぶ機会を設けることによって進路先の研究をし、進路選択と決定の足掛かりとさせる。これらは、人生で初めて将来の生き方を考える機会となっている。

これらの取り組みはすべて生徒指導とリンクしており、教育課程で周到に計画準備された教育活動でもある。このような生徒指導は教育課程の中で位置付けられており、計画的に取り組む進路指導という流れの中で行われている。このことを具体的に示す実践例を次に紹介する。⁶⁾

これは神戸市のある中学校の取り組みである。「命の教育」として総合的な学習の時間に位置付け三年間の教育課程の中で実践している取り組みの概要である。この学校は阪神淡路大震災の直後におきた須磨事件と言われて連日報道された当該校であった。この中学校は生徒指導はもちろん学校経営すら立て直しを迫られた学校であった。静かな新興住宅地に位置する学校での事件は、早急に青少年に命の教育をしなければという緊急課題にまで発展していた。この事件前の大震災ではボランティア活動に奔走する中学生の姿が若者の見本のように言われていた。また、事実被災地では中学生を含め若者たちの活躍が目立った。しかし、皮肉にも同じ神戸市での事件だけに中学生に対する不信感、恐怖感が再燃した。そのような風潮の中、兵庫県教育委員会は「トライやるウィーク」を立ち上げた。これは従来からの職業体験であり進路学習の一環として捉えられているようであるが、設立当時の教育委員会の指導主事は生徒指導で常に強調されている「心の教育」と訴え、須磨事件で失われた中学生の社会的信頼を取り戻し、中学生の存在を地域社会に再認識させる機会ととらえて出発させてほしいと協調したのである。文部科学省がキャリア発達で示している他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図って、協力共同して物事に取り組む「人間関係調整能力」の養成でもあった。この行事は、学ぶことや働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かすというキャリア教育の目的を達成するという組織的な行事が全国に先駆けて兵庫県下の全中学校で実施されるようになった。

各学校ではPTA、地域諸団体の協力を得て職場や事業所の開拓に年度当初から奔走した。須磨事件の影響もあって中学生の受け入れに対する地域社会の不信感は強く職場開拓は難航したが、以前から生徒指導を中心に青少年育成に協力していただいている地域諸団体の尽力で実施にこぎつけたのである。こうして出発したトライやるウィークであったが、兵庫県教育委員会のねらい通りトライやるウィークで見せた中学生の清々しい活躍が当時の一般社会の認識を刷新したのである。こうして中学生は「肯定的自己理解」と「自己有用感」を獲得していったのである。まさに「心の教育」と「進路学習」の再出発であったのである。ここで、この行事で中学生が活動中の老人介護施設を訪問した時の筆者の印象と激励した言葉をまとめて次に示す。

- ・名前と顔と病気の特徴をよく覚えていますね
真剣に介護した人が言える言葉です
- ・何かをするとき声を掛けていますね
今まで関心を示さなかった人にも伝わりますよ。
- ・ありがとうという言葉に感激していますね

中学生の存在が感謝されているのです

- ・自分が変わるようになる第一歩ですね

まさに体験は人を変えますね

- ・私のことを覚えてくれていた

どんな人でも感動したことは忘れません

- ・困っている人を助ける自信がついたね

人生に自信もつようになりましたね

- ・仕事の大変さとコミュニケーション

今回のように仕事と感動を重ねられるとお互いに幸せになりますね

以上、トレイやるウィークの説明が長くなったが、前述の神戸市須磨区の当該中学校では、今も教育課程に位置付けられ、当該区役所等行政機関の協力で実施されている「命の教育」は全国からも注目され、学校正常化を果たしてきた。これは、生徒指導及び進路指導の柱であり、計画的組織的な生徒指導の一例である。特に「心の教育」として位置付けた兵庫県教育委員会の方針は現在も変わらず各学校や地域に浸透している。

次に、震災後の激しい人口流動の中で開設した神戸市の新設中学校での教育計画を示す。ここでは、「進路学習」を教育課程の中核に位置付けており、教育目標を明確にして三年間の主な行事の流れや「総合的な学習の時間」の活用を示している。進路指導の目指す方向や意図が明示され、学校教育の向かう方向がよくわかる資料である。⁷⁾

ここで特筆すべきは、入学後間もないころから三年後の修学旅行の行き先が示されていることである。一般的には保護者へのアンケート等で行き先を決める学校が大半であり、それまでは行き先に教師の教育的な意図が入り難い状況が多く为学校であったが、この学校では教師の主體的な教育方針や意図が汲み取れる。この教育計画は情報公開と同様で保護者に向かって常に広報され、学校行事等の機会あるごとに公表され、かつ保護者や地域の意見も募集している。さらに公表の度に更新されてより具体的になっている。このように常に保護者に対し教育方針を示し、具体的な教育課程を意図的に保護者に伝えることによって保護者が学校教育に協力しやすくしているのである。この学校では制服制定、PTA 設立、「トライやるウィーク推進委員会」、「行事運営」さらには「いじめ防止」等で保護者の果たしてきた役割は大きい。学校教育そのものの主体は教師と生徒であり保護者がそれをサポートするということを示す「開かれた学校」の典型的な姿であろう。

ここまで、生徒指導困難校で学校正常化に向けた第一歩は「学習指導」から始まったという取り組みをはじめ、「組織的な教育課程の実践」が「進路指導」「生徒指導」を一つにしている取り組み等を紹介した。大学の教職課程を履修する学生はこれら「教師の意図的な指導形態」を知り考察することによって、一層教職への意欲や志を新たにしているのである。

参考文献

- 1) 文部科学省(編)(2008)『中学校学習指導要領解説(総則編)』ぎょうせい出版
生きる力をはぐくむ各学校の特色ある教育活動の展開が P19、20 で示されている。
- 2) 文部科学省(編)(2010)『生徒指導提要』教育図書
- 3) 文部科学省委託調査(2006)「教員意識調査報告書」文部科学省

仕事として一般企業人と教師の意識の違いがグラフで対比されており、教師は使命感が強い仕事ということがよく出ている。

- 4) 東京都教職員互助会（編）「教員のメンタルヘルス対策と効果測定」ウェルリンク社
一般社会人は職場の人間関係を問題にしているが、教員は少ないという特徴がある。
- 5) 文部科学省（編）（2006）「キャリア発達にかかる諸能力」文部科学省HP
- 6) 神戸市立友が丘中学校（編）（2006）「総合的な学習の時間実践報告書」
- 7) 神戸市立有野北中学校（編）（2002）「進路指導と総合的な学習の時間の全体計画」